

三縁の慈悲

仏道とは

仏道とは「仏と鬼」との関係交渉である。

仏とは智慧と慈悲との覚体であつて、衆生を救つて下さるみ親、鬼とは煩惱具足の我ら凡夫のことである。誠に凡夫たる我等は鬼である。親を食い子を食い衆生を食い、一切を食うているものである。鬼には二本の角が生え、口は耳までさけておる。角は邪見の象徴、さけた口は残忍の相、常に人の善悪を裁きつつ、しかも自らは決して自らを見ようとしなない。衣食足ればおごりたかぶり、衣食が足らなければたちまちその本性を暴露して、邪見な角をふりかざし、我慢の牙をかみならし互いに傷つけあい、わが子さえこれを食う。大経に言わく「強き者は弱きを伏し、転うたた相剋賊し残害殺戮せうくす」と。この一句だけでこの生死界の実相はつくされてある。食うて喜び食われて泣く、弱肉強食、鬼だ鬼だ。百鬼夜行の闇の世である。その鬼を救いたまうのがみ仏である。重ねていう、鬼とは煩惱具足の凡夫である。

大慈悲

「仏心とは大慈悲これなり」（観経）

この観経のおことばは、仏教を頂きはじめて最初から、命のおわる最後まで忘れることの出来ないみことばである。忘れることが出来ない、それではまだ足りない。学問するにも、ものを考えるのにも、これのみが中心となつてくる。大慈悲こそ私たちの生命であり、光であり、道であり、親であり、力であり、帰依処であり、信であり、喜びであり、安らぎであり、船であり……つまり私の全てである。み仏の大慈悲がなければ、私の発散するものはただ愛と憎とのみである。

釈尊というも大慈悲であり、諸仏というも大慈悲である。大慈悲とはしかし南無阿弥陀仏である。しかして「大慈悲はこれ仏道の正因」（論註）であるとは親鸞聖人の第一提言である。大慈悲のないところに道があろうか。自覚があろうか。大慈悲のないところには、無明煩惱のみがある。

三縁の慈悲

曇鸞大師は論註に、三縁の慈悲ということを説かれた。衆生縁の慈悲と、法縁の慈悲と、無縁の慈悲とである。しかして衆生縁の慈悲は小慈悲、法縁の慈悲は中慈悲、無縁の慈悲は大慈悲と言われ、小慈悲は凡夫の慈悲、中慈悲は小乗の慈悲、大慈悲は仏菩薩の慈悲であるとせられる。

衆生縁の慈悲とは、凡夫が衆生を縁じて起こす慈悲である。縁じて起こすとは見て起こすのである。衆生の気の毒な有様を見て起こす慈悲である。復員者が港に上陸するや、「ご苦労でございました。」と言葉をかけられてすら皆泣いたと言う。人生はこの慈悲によりて成り立つのである。人の苦しみを見て一掬きくの涙を流す、それが時に人の一生をすら支配する。しかしこの慈悲は小慈悲である。たちまちに消え、たちまちに濁る。

法縁の中慈悲とは二乗の慈悲で、法を縁じておこす慈悲である。法を縁ずるとは法によつて、法を知り、法に照らして起きる慈悲である。たとえば、重い病人を見て気の毒なことだと涙するのが凡夫の小慈悲であるならば、医者が病人を見て起こす慈悲のごときものが法縁の慈悲であろう。執着よりほか何物もない迷いの凡夫を、一切空の理を悟れる小乗の聖者が見ておこす慈悲である。

無縁の大慈悲とは実に仏の大慈悲である。無縁とは、あらゆる縁を絶したる大慈悲、千縁万縁を絶したる慈悲とは、それ自体大慈悲であること、あらゆる縁を離れての慈悲とは、あらゆる縁においておこる慈悲ということであろう。凡夫の慈悲は哀れなるものにおいては起き得ても、憎むべき者においては起きないであろう。小乗の慈悲は悟れる法による慈悲なるがゆえに、悟りに限界がある限り、慈悲にもまた限界があろう。それゆえに無縁の大慈悲は、無縁の智慧によつて起こる慈悲であつて、一切の限界を越えたる無限の慈悲、無底の大悲ということが出来るであろう。誠に無縁の大慈悲とは、無限絶対の大慈悲である。有縁の慈悲とは有限の慈悲である。無限の大慈悲を今、無縁の慈悲と表現せられたのであろう。

信の自覚

われらは衆生縁の慈悲に生かさされ、法縁の慈悲によつて救われ、無縁の大慈悲に摂取せられる。觀經には「無縁の慈をもつてもろもろの衆生を摂す」と説かれてある。しかるにここに考えねばならぬことは、慈悲というのもつまりは感得するものであるということである。感得するものであるがゆえに、内に信心の智慧が無ければ感得することはできない。ここに一人の寺院の住職がいたとする。もし彼が守銭奴であつて、講師を招いて説教をさせるのもつまりは寺に金が落ちるのを喜ぶことだけであつたならば、彼には全く法縁の慈悲を感得することはできないであろう。ましてや、仏の大慈悲の摂取などが感得できようか。そうすると慈悲という問題は、汝の心の眼、心の耳、つまり自覚の問題である。法縁に会わない人は、ただ人間愛すなわち衆生縁の慈悲のみに生きる人である。いかに超世無上の正法を聞かせても、それが慈悲であるとは感じられない人には、またそれを通して無縁の大慈悲を領解感得することはできないであろう。

かくのごとく、慈悲は感得するものであるとするならば、三縁の慈悲というものもまた、大中小の分類だけでは説明はつかなくなるであろう。何となれば念仏行者にとつては、法の縁に会うことは、小乗の中慈悲ではなくて、法縁のままを仏の大慈悲の具体的な相と感ずるからである。われらは念仏の心において、同行善知識に会うことにおいて、衆生縁の慈悲を感じる。しかしそれはそのまま法縁によつて結びられるがゆえであり、さらに法縁が慈悲であると感ずるのは、それによつて、もつと深い無限の大慈悲海に帰入するがゆえである。無限の大慈悲がわれを摂取することを感じることによつて、はじめて法縁は、そのまま、この大慈悲より出でたものであることを知り、やがてこの法縁につながる同行善知識に遇いえたる美しき衆生縁の慈悲においても、いよいよ念仏の大慈悲を感謝するのである。

かく考える時、衆生縁の慈悲と法縁の慈悲とは、無縁の大慈悲の具体的な両面であることが知られてきて、観音を衆生縁の、勢至を法縁の慈悲の表現であるとの説も肯かれることである。観音は永久に生死海に來たつて一切衆生の苦悩に同感し、その拳身こしんの光中には一切衆生を映し、一切衆生を無条件につつんで一人として残すことなく、それゆえに永久に成仏せられぬのである。しかるに勢至菩薩は法を説いて衆生を救うのであるが、勢至の説法を聞きうるものはただ有縁の衆生のみである。観音の慈悲には一切衆生ごとく抱かれていてその運命を育てられつつ、勢至の説法すなわち法縁の慈悲には縁の有るものだけ遇うことが出来るのである。これが道とか自覚とかいうものの意味であろう。

かく衆生縁によりて法縁の世界が開け、さらに内なる宿善の開発したもののだけが、無縁の大悲の境地に出てくるのである。この世界に出てこない、衆生縁、法縁の真の意味は出てこないがゆえに、祖聖が「今の行者、錯あやまつて脇土きょうじにつかうることなかれ、ただちに本仏をおおぐべし。」と言われるのであろう。阿弥陀仏の大慈悲に目ざめてのみ、法縁の意義がわかり、衆生縁の世界も美しいものとなるのである。

思えばこの三縁の慈悲の問題こそ人生そのものを解くカギであろう。衆生縁だけの世界には、ついに醜い争いや、低い本能的な生存よりほか何ものもないであろう。法縁の慈悲の世界、広く言えば真の教育を受ける世界に出てこなくては、そして、それによつて無限の仏智の世界に帰入してこなくては、いつさいの問題は解けてこないであろう。

慈悲の感得

すでに慈悲は感得するものであることを述べた。真に獲るとは感じることである。感じえたものだけがその人のものである。感という字は業感縁起とか修因感果とか使われて、迷いにもせよ悟りにもせよ、果を得ることを感と言うのである。

聖道門型の人は、自分がいかに感ずるかよりも、他をしていかに感ぜしめるかを問題とし、浄土門の人は、人をしていかに感ぜしめるかというより前に、我がいかに感ずるかを問題にする。慈悲を行ずることも困難であろうが、慈悲を慈悲として受け取つて慈悲は感ずることはむづかしいことである。世界一の親切さえ時にはあだになる因となることがある。市井しせいの無頼漢は、師や親や友人の親切を慈悲とは受け取れないで悪友の言に感じ易かつたのであろう。かくていかなる慈悲も慈悲と感ぜられない以上、慈悲は慈悲となることはできない。

念仏の世界においても、宗教家の人間的親切のみが受け取られて、その説くところの法が受け取られないならば、衆生縁の慈悲ではあつても法縁の慈悲とはならない。たとえ法は受け取られても、それが単に知性的に観念的に受け取られたのでは、法縁の慈悲とは言われても、無縁の大慈悲の境地に入ることはできない。ここにおいて、法縁の慈悲が小乗の慈悲と言われることも「小乗の人の感ずる慈悲」とも考えられ、大慈悲が真に感得せられる世界を「大乘の世界」と言うことができると思う。何となれば我等は何らの慈悲を持つていないという反省において本願の大慈悲

を受け取れば、直ちに大乘正定聚の人、等正覚の菩薩、諸仏等同とさえ言われるがゆえである。大慈悲を自ら成就することと、大慈悲を感得することとは畢竟同価値であらねばならない。ゆえに聖道門の人は智慧を極めて慈悲に入り、浄土門の人は大慈悲に救われてやがて信心の智慧に至ると言われる。

信心の智慧

観經の真身觀には「光明あまねく徧十方世界を照らし念仏の衆生をば摂取して捨てたまわず」と説かれ、やがてまた「信心とは大慈悲是れなり、無縁の慈をもつてもろもろの衆生を摂す」と説かれた。

これによると、光明に摂取されるとは、無縁の大慈悲に摂取せられることである。仏の大慈悲のおん心のうちに摂めとられるのである。念仏衆生摂取不捨とは、信心の行者は光明、すなわち大慈悲なる信心に摂めとられるのである。しかるに信心とは、無縁の大慈悲をその本願の御意において受取つたのである。受取るとは感得したのである。御法の縁に遇うことにおいて、すなわち聞其名号信心歡喜と名号を聞くことによつて、無限の大慈悲を感得したのである。法縁に遇うことによつて、それによつて無縁の大慈悲を感ずること、底ぬけのお慈悲を感ずること、感ずることは獲ること、であるからその感得する心そのものが大慈悲によつて発るところのもの、氷によつて冷たさを感じ、火によつて熱さを感じ、梅干によつて酸味を感ずると同じく、大慈悲によつて大慈悲を感ずるのであるから、信心はすなわち大慈悲と言われる。

であるから、聖人『唯信鈔文意』に「この信心すなわち大慈大悲の心なり。この信心すなわち仏性なり。仏性すなわち如来なり。」と言われる。信心は大慈悲である。しかしてこの大慈悲こそ仏道の正因、信巻末には「大慈悲は仏道の正因なるが故なり。」と仰せられた。まことにかくして念仏の行者は正しく尽十方無碍光如来の大慈悲にむかつて開眼せしめられたものであり、大慈悲を獲たるものであつて、道の本質、自覚の本源、人格成立の第一義諦を決了満足せるものである。だからして絶対の信心を「智慧の念仏」といい「信心の智慧」といわれるのであろう。大慈悲を大慈悲として感得するものは誠に信心の智慧である。もし少しでも大慈悲にむかつての曇りがあれば、それは信心の智慧の曇りである。我等が、一文不知の老婆であつても無我に大悲本願を喜んで生きる人の上には「智慧」の輝きの尊さを見ることが出来るのは、信心の智慧によるのであろう。

底ぬけの大慈

念仏の行者は、真実教を聞信することにおいて底ぬけの大慈悲を感ずる。それは教法を頭だけの知性的観念的な受取り方をしないで、全我の上に身をもつて体験するからである。知識学識は頭にあり、智慧は全身全我の上にある。仏教においては、それが聖道にもあれ浄土にもあれ、いかに難しい学問であろうとも、決して学問のための学問、思弁のための思弁ではなくて、必ず行学である。全我の上に必ず行と

なつて現われなければならぬのである。浄土他力の法門においてもまた然りである。

教法を聞くとは信ずること、信ずるとは行ずること、聞、信、称は次第しつつも一念同時である。聞くとは「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつところのおこる」ことである。だから真の聞には信称を具し、真の念仏には聞信を具するのである。かくて念仏を行ずる者は、南無阿弥陀仏と称えるままの上に、如来無限の大慈悲を感得するのである。それゆえに信心の人を常行大悲の人といわれる。

何ゆえに念仏において無限の大悲、底ぬけの大慈悲を感得するのであるか。それは信心の智慧は、自身の罪悪生死の凡夫であることを深信するがゆえである。罪悪深重、煩惱熾盛の自覚において自力無効を信知して、ただ仏願によつて下品下生の悪人が救済されることを信知するがゆえである。大慈悲を知るものは無有出離之縁の自身を知る。浮くすべのない鉄槌が浮かぬままを乗せられる。たすかる手がかりのないものが助けられるのが南無阿弥陀仏の大慈悲である。

かくして無縁の大慈悲の世界に入ることを得るものは、真に自身を知り、自力無効を知つて大地に合掌せる人である。人は生死の巷ちまたの雑音によつて外に外にと外向きに生きて流転輪廻するか、真実教によつて内に向かつて自己にさめ、廻心懺悔して本願海に帰入するか、外向か内転か、この二つよりほか生きる道はありえない。したがつて悪人正機とは、「他力をたのみたてまつる悪人」とは、決して殺人強盗などの外向性の悪人をさすのではない。至悪至愚の泥凡夫とさめて、底ぬけの大慈悲に撰取せられて合掌念仏する内転性の悪人、功德の大宝海をその身に満足せる、凡夫さながらにして等正覚と讃えられる悪人である。全身全霊すなわち煩惱具足、この煩惱具足の深信が大慈悲を感得するのである。

人生の根本問題

かくして衆生縁の慈悲のみに生きるものは流転し、法縁の慈悲の世界にとどまるものは独覚性によつて独善懈怠の世界に幽閉せられて、真の自身と如来とを知ることができない。ただ宿善開發して発達招喚の教勅にあうものは、全我を大地に投げ出して無縁の大慈悲の境に帰入するであろう。

しかるにこの無縁の大悲に撰取せられたるものは、たとい無仏の国にあつて生死動乱のただ中に、人の世の冷厳無情のみ受け取る日が来たつても、千縁万縁いかなる苦悩の中にも、ますます無有出離の宿業を感じ、大悲を感じて、念仏不退なることを得るであろう。衆生縁法縁の温かさなくとも、ついに念仏一貫して撰取不捨の大慈悲を生きる。ここにも特に大慈悲を無縁といわれるゆえんを思うことである。かくてただ無縁の大慈悲の信のみが念仏不退を獲るのである。もし人、一度この無縁の大慈悲の世界に入れば、法縁の慈悲もついに真に生きてきたのであり、衆生縁の世界もまた浄化されてくるであろう。無信邪見なる母は子に衣食住などにおける享樂的孝行を強い、念仏の親は、ただわが子が念仏一道に生きることをもつて無二

の孝道と感謝するがごとくである。されば三縁の慈悲の問題はついに人生の根本問題となるのである。